

通りから見た『エドウィン・ドルードの謎』 *The Mystery of Edwin Drood Viewed from Streets*

藤井 晶宏
Akihiro FUJII

ディケンズが繰り返し小説の舞台として選んだのは、言うまでもなくロンドンだった。それ以外の場所を一切描かなかったわけではないが、ロンドンが彼にとって、かけがえのない重要な場所だったことは間違いない。その彼が、最後の小説『エドウィン・ドルードの謎』(*The Mystery of Edwin Drood*, 1870)で、クロイスタラムという小さな町を舞台に選んでいる。死は偶然だから、「最後」ということに特に意味はあるまい。ただ、それまで繰り返しロンドンを描いていた彼が、クロイスタラムを描いたことは重要である。

しかしすぐ気がつくのは、多種多様な人がまるでたらのめのように行き交い、常に動きを連想させるロンドンと、クロイスタラムが実に対照的な場所であるということだ。クロイスタラムはまず、古くて単調な活気のない町として現われている。

An ancient city, Cloisterham, no meet dwelling place for any one with hankerings after the noisy world. A monotonous, silent city, deriving an earthy flavour throughout from its Cathedral crypt,²

もう一つ忘れてならないのが、大聖堂が中心に位置している町だということ。この場合の中心とは地理的な意味ではない。それは、上の引用の「香り」のように、町全体に影響を及ぼし、クロイスタラムというまとまりを支えているという意味での中心である。そのまとまりは、住人たちに、変化というものはすべて過去のもので、これからはもうやって来ないという思いが共有されている(19)という事実にも反映している。

町中のすべてのものが過去のもの(19)といいながら、しかし、すぐさま語り手はそれを裏切るように、クロイスタラムにも、新しいものがあることを語っている。例えば、町の中央に位置する尼僧学院の古い建物の玄関に、不釣合いなまで

に光り輝く真鍮のプレートが置かれていて、それがモダンなめがねを連想させているといった具合に。

The house-front is so old and worn, and the brass plate is so shining and staring, that the general result has reminded imaginative strangers of a battered old beau with a large modern eye-glass stuck in his blind eye.

(19)

この新しさ(modern)は、本通りをはさんで真向かいの競売人サブシー氏の店にも見られる。尼僧学院と同じ頃に建てられたこの店も、ところどころ不規則に近代化(modernised)されているという(31)。どちらも周囲の古さとうまく調和していないといううらみはあるものの、とにかく新しさはクロイスタラムの中にも存在している。

しかしここで注目したいのは、町の中央にあるこの二つの建造物が不釣り合いな新しさを持っていることではなく、その二つの建物の中に本通りがあることだ。この事実には、象徴的な意味を読み取ることができる。そもそもこの本通りは、事実上この町を貫く唯一の通りであり、外界とクロイスタラムを結ぶ主要な交通路だった。この物語が始まった時点で既に、近くに鉄道が開通したことで、本通りがロンドンへの主要なルートとしての座を明け渡している(55)とはいうものの、この通りが外界に通じていることには変わりがない。クロイスタラムの住人は、本通りを歩いて馬車乗り場まで行き、そこから馬車で最寄の駅まで行くからである。しかしそのことは同時に、通りが、クロイスタラムという一律の空間に、外から異質なものをもたらすルートにもなることを意味する。ちょうど、古い町の真中に、新しさを持ちこんだように。

登場人物を通りに属する存在として描いたとも言われる³ディケンズにとって、通りという空間が重要な空間であったことに、改めて触れる必要はないかもしれない。しかし、何よりロンドンにおける通りに、上で言ったような性質があったことを確認することは無意味ではないだろう。元来、線状に延びる通りは、ロンドンという枠を超えてネットワーク状に無限に広がるルートにつながっていた。そのことがロンドンを、多様な人の流入する開かれた空間にしていたのだから。

無限に広がるルートすべてを「通り」と呼ぶことはできないにしても、ロンドンの中の通りが、それらのルートから切り離されたものとして存在していないことも事実である。つまり、ある意味で人は通りの上にいる限り、無限に広がる空間にさらされていることになる。それは、非常に広い空間にぼつんと置かれている状態に似て、どこか人を不安にする要素を備えている。

ディケンズの小説にしばしば登場する監獄的空間は、それを補償する役割を果たしていた。ここでいう監獄的空間とは、必ずしも否定的な意味を持つものでは

ない。ディケンズに限らず、多くの人によって理想的な空間として考えられていた家庭も、監獄的な空間の一つである。一見相容れないように見える監獄と家庭だが、『リトル・ドリット』(Little Dorrit, 1855-57)において、両者が一体だったことを我々は知っている。どちらも限られた空間で、外の世界がむやみに流れ込まないようにしているという点で、共通している。さらに家庭の場合は、その守られた安全な空間で、炉辺の天使ともいうべき女性を中心に、外界に優越する価値が醸成され、一種の聖なる空間が作り上げられていたが。

クロイスタラムは、こうしたロンドンを描いたディケンズが描いたものである。クロイスタラムを貫く本通りも、ロンドン及びそれ以遠の通りに通じていて、そこに誰でも行き来することが可能な、連続した均質な空間を形成している。それは、ロンドンと同じように、クロイスタラムにも様々な人がやって来ることを可能にしているということでもある。ただ、ロンドンと違ってクロイスタラムのような一律の世界の場合には、古い町に新しさが入るときのように、一種の破綻をもたらすことにつながるはずである。

こうした環境の中にいながら、住人たちが、クロイスタラムにはもはや変化は訪れないと思うことができたのは、小説開始以前まで、そうした破綻がごく小さなものだったからにすぎない。この環境を決定的に変えたのが、第6章で告げられた、近隣の地への鉄道の開通である。それは、新しい時代の到来だけでなく、まもなくこの町が、より大きな破綻を経験することを予告していた。

*

クロイスタラムの誉れと呼ばれ、後に町長にもなるサブシー氏はクロイスタラムを代表する人物である。彼の意識の中では、町長とは、それがなければ社会の枠組みすべてが崩壊してしまうほどのかなめの存在ということになっている(127)。「枠組み(framework)」という言葉が暗示するのは、ある境界線によって囲まれた領域である。愛国的な歌に感動し(128)、外国を唾棄する彼にとって、崩壊しないように囲まれた領域とは「英国」に他ならない。クロイスタラムは、そのまま彼の考える「英国」の縮図なのである。

先述したように、古さの中に不規則に新しさを持つサブシー氏の店は、また、大きな破綻を起こさない程度に、外国という外の世界を持っていた。彼は、「私が外国に行かなくても、外国がやって来る」と豪語するが(33)、彼にとっての外国とは、財産目録やカタログを作るときに、いつでも指で押さえられる無害なその国の製品にすぎない。鉄道に反対し、本質的に鉄道が発達する以前の世界を享受する彼にとって、外国とは大きな破綻を起こすような生々しい体験としての外国ではなかった。

そこに、鉄道開通によって誕生した新しいルートを通して、セイロンという外

国がランドレス姉弟という肉体をそなえてこの町にやってきた。彼らはまさに無害ではなく、エドウィン・ドルード失踪（或いは殺害）という大事件のきっかけをつくり、活気のないこの町を大きく揺さぶることになる。これが、クロイスタラムの住人にとっても、サブシー氏にとっても、心地よいものでなかったの言うまでもない。当然サブシー氏は、ネヴィル・ランドレス青年に好意的でなく、それは、ネヴィルの顔色を「非英国的」と呼ぶことに端的に表われていた(164)。

この騒動は、最終的にはクロイスタラムの中心である大聖堂の首席司祭が、ネヴィルを追放すると決めたことで一応の終息をむかえる。サブシー氏は後々までネヴィルをエドウィン殺害の犯人と確信し続けることで、大聖堂の判断に追随する。彼らにとってクロイスタラムは、ある枠によって閉じた世界であり、異質なものを排除することによって守られる世界である。異質なものは、サブシー氏の言葉を借りれば、「非英国的」ということになるのだろう。

面白いのは、エドウィン失踪後、「非英国的」なネヴィル・ランドレスが、クロイスタラムの住人による噂の中で次のように言われていることである。

[Neville Landless] had been brought down to Cloisterham, from London,
by an eminent Philanthropist, (185)

彼は確かにハニーサンダー氏というロンドンの博愛主義者に連れてこられたが、セイロンから来たというほうが正確である。そのことを知らないのかもしれないが、クロイスタラムに来る前のネヴィルについて、アジアやアフリカだけでなく、北極にもいたことがあるといったような(185)、いい加減な噂をふりまくクロイスタラムの住人にすれば、ネヴィルが、セイロンから来ようとロンドンから来ようと、本質的な違いはない。どちらもクロイスタラムから見れば、新しいルートの延長線上に混在する外 = 「非英国的」の世界だからだ。(ロンドンが「非英国的」とは一見奇妙だが、それは彼らが守ろうとする「英国的」なものが、ロンドンのような多様さを排除することで成り立っていることの反映だろう。)

彼らは、余所者が侵入してきて、町を揺さぶったことが不快なのだ。ある共通の意志が行き渡り維持されるためには、それを関係のない余所者がかき乱さないような環境が必要なのは言うまでもない。最初に触れた「家庭」とはそうした空間の代表だった。乱暴な言い方をすれば、サブシー氏は、クロイスタラムを「家庭」のような、いわば「聖なる」空間にしようとしているといえる。クロイスタラムの中心が、大聖堂という宗教的な建造物であることも、そこが「聖なる」空間を志向するものであると感じさせる。

しかし、「家庭」と違って、外界に通じるルートによって貫かれたクロイスタラムでは、サブシー氏 = クロイスタラムの意志は常に挫折させられることも明らかである。(少なくとも残された範囲内では、最初に触れたような、中心に女

性が炉辺の天使として存在するような「家庭」が、この小説に成立していないことも示唆的である。)彼らが鉄道を敵視するのは当然としても、いかに彼らが抵抗しようとも、遅かれ早かれ、鉄道はますます余所者を連れてきて、クロイスタラムを「崩壊」させるはずである。

*

一方、新しいルートを通して現われたネヴィル・ランドレスは、エドウィン失踪後、殺害を疑われてクロイスタラムを追放された。その後彼は、ロンドンのステイブル・インの一角に一人で住むことになる。我々にとって興味深いのは、彼にはこの場所が、クロイスタラムからの避難所であると同時に、通りからの避難所でもあったことだ。

あるとき、この場所を訪れたクロイスタラムからの訪問者クリスパークル氏に、ネヴィルは次のように言っている。

'If you had gone through those Cloisterham streets as I did; if you had seen, as I did, those averted eyes,' (196-197)

'I cannot persuade myself that the eyes of even the stream of strangers I pass in this vast city looked at me without suspicion' (197)

ロンドンに関する後半部分の彼の感覚は錯覚のはずである。大都会ロンドンでネヴィルのことを知っている者がそれほどいるわけではないのだから。しかし錯覚であれ何であれ、大切なのは、クロイスタラムの外にいるにもかかわらず、通りにいる限り、クロイスタラムの通りでの体験を繰り返していると彼が感じていることだ。

何の障害もなく人が移動できる均質な空間としての通りは、つまり、クロイスタラムにロンドンやセイロンをもたらしたように、ロンドンにクロイスタラムをもたらす道筋として経験されている。その結果、彼はまるでクロイスタラムが彼を追いかけてロンドンにやってくるかのように感じ、暗くなるまで外出を控えて、部屋に閉じこもらなければならなくなった。ロンドンの通りが、常にこうした外からの侵入にさらされる場所であることは、最初に触れたとおりである。

しかもそのとき触れたもう一つのロンドンの特徴も、ここには忘れられていない。通りからの避難所としての「監獄」の存在である。昼の間彼を守ってくれるその部屋は、通りの侵入できない監獄的空間である。「監獄のような外観」(196)をしているのも偶然ではない。

この小説には、ロンドンに避難所を求めてくる人物がもう一人いる。エドウィンの元婚約者ローザ・バッドである。エドウィン失踪後、彼女は忌み嫌うジョン・ジャスパーから愛を打ち明けられ、クロイスタラムから逃げ出さなければなら

なくなった。馬車と鉄道を乗り継ぐ例のルートを経て、瞬く間にロンドンの通りに現われると、後見人グルージャス氏がいるステイブル・インに彼女も逃げ込んでいる。ステイブル・インが「監獄」の要素を持つことは既に述べた。彼女の場合、その後グルージャス氏の紹介で、近くのファニーヴァルズ・インに泊まることになるが、そこも「檻」と呼ばれている(235)。門にある鉄のパーも監獄を連想させる。

「監獄」に避難した彼女もまた、クロイスタラムからだけでなく通りからの避難者だった。語り手がわざわざ告げているように、ローザが利用したクロイスタラムとロンドンをつなぐルートは、ジャスパーの通り道でもあるから、通りにいる限り、彼から身を守ることはできないのだ。

[Jasper] travels thither by the means by which Rosa travelled, and arrives,
as Rosa arrived, on a hot, dusty evening. (262)

もう一つ注目すべきことは、彼女がクロイスタラムを逃げようと決意したとき、本通りを初めて一人で歩いた、とあることだ(226)。頼るものもない不安な彼女の心境を暗示してもいるのだが、それ以上にこのとき彼女が、ロンドンやセイロンにまで延びる均質な空間に一人でさらされていることを意味している。さらに肝心なことは、このときの彼女の不安感が、クロイスタラムを離れることによってしか解消されないことである。結論から言えば、それは彼女にとって、この町には避難所(「監獄」)がない、つまり全てが「通り」に過ぎないということである。だから彼女は、クロイスタラムそのものから逃げなければならなかったのだ。

先程のネヴィルの例においても、彼にとってクロイスタラムでの体験が、何より通りにおける体験として残っていたことも、クロイスタラム全体が「通り」であったためだと考えられる。ついでに言えば、クリスパークル氏が伝える、ネヴィルの姉ヘレナがクロイスタラムの人たちに尊敬されるようになったという消息も、通りに関わって表現されていた。

‘[Helena] has won her way through those streets until she passes along
them as high in general respect as any one who treads them.’ (199)

クロイスタラムが「通り」であるとは、その中心に通りが走っているという意味だけではない。その両側の建物でさえ、通りを閉め出す力はないということだ。本通りに面しているローザの住んでいた尼僧学院は、町の中央にある建物にふさわしく、こうした「通り」としてのクロイスタラムを体現するように、外界を閉め出す力を持っていない。しばしば例のルートを往復するジャスパーに対して、尼僧学院の堅固な壁がまるで無力だと彼女には感じられているのはその表われである(226)。さらにそれ以前の、ネヴィルとエドウィンの喧嘩があったと

いう知らせの伝わり方も、この建物の性格をよく伝えている。開いている窓から鳥や風が運んできたのか、外でほこりをはたいたときにくっつけて持ちこまれたのか、といった具合で(81)、極めて外界を閉め出す力が弱い建物なのだ。

玄関に掲げられていた真鍮のプレートも、ロンドンでのローザの下宿先、ピリキン夫人の真鍮のプレートと比べると、その開放的な性格が明らかである。尼僧学院のプレートが“Seminary for Young Ladies. Miss Twinkleton”(19)というように、性別を含め内部に住むものの情報を外に告げているのに対し、ピリキン夫人の“BIL-LICKIN”(249)という性別不明のプレートは、住んでいるのが女性一人であるという内部の情報を隠し、ひょっとしてピリキンという男が戸口(street-door)近くに隠れているのではと思わせることで、外界の侵入から身を守っているという点で、その下宿が「監獄」的であることを示している(252)。

外界からの侵入を想定してこなかったクロイスタラムに、ロンドンにあるような「監獄」がないのは当然かもしれない。その意味で「通り」としてのクロイスタラムは、鉄道の開通によって、露呈してきたものだ。しかし、クロイスタラムが「通り」だとすれば、問題になるのは大聖堂の存在であろう。均質な通りとは異質な世界を志向する大聖堂は、それが元来クロイスタラムの「中心」であることによって、通りと鋭く対立する。通りとは中心を持たない空間だからだ。ここに現われる対立は、時代は刻々と変化していたにもかかわらず、クロイスタラムの住人が変化はもはや訪れないと思っていたという事実にそのまま重なっている。

この対立を自分の問題として独りで抱えていた人物が、ジャスパーである。「中心」にいて、そこに奉仕しながら、同時にそこがもたらす退屈さに苦しみ、例のルートを通して何度もロンドンの阿片窟へ行かなければならなかった彼は、エドウィン殺害の容疑者としてだけでなく、町が抱える通りの問題を集約して表わしているという意味でも重要である。だから、次に述べるように、彼は余所者をクロイスタラムに招き寄せて、退屈な「中心」を解体することに貢献するが、同時に、自らも追い詰められる対象になっているのだ。

小説の終盤に、我々が目にするのは、クロイスタラムの最後の砦である大聖堂が、ジャスパーをめぐって、通りに侵食されていく様である。まず、クロイスタラムにどこからかダッチェリー氏なる男性がやって来る。その正体は、誰かの変装だともいわれているが、未だにはっきりしていない。ただ、ドルード事件を解決するためにやってきたのであろうという点では、多くの意見が一致している。その彼は、ジャスパーの部屋に隣接するトープ夫妻の家に下宿することを決める。ジャスパーを探るように近づいてくる彼が、同時に自室の扉を本通りに向けて開き、暗い室内に光を入れようとしていることは注目に値する(209)。それはクロイ

スタラムの「通り」化をさらに推し進める行為だと考えられるからだ。このトープ夫妻の家が、本通りから大聖堂の境内に曲がる道に、またがって建っている門番小屋に隣接しているという事実は、彼の行為の結果が単に彼の部屋だけでなく、その背後に控える大聖堂にも及ぶ可能性を暗示している。そしてその直後、偶然からサブシー氏と接触し、大聖堂にまで案内されている。彼は着々と、クロイスタラムの「中心」へと通じる道筋をつけたのである。そこに、ロンドンからジャスパーを追って本通りを歩いてきた阿片窟の女主人プリンセス・パッファが、その開かれた扉に姿を現わした。パッファが自負するように、誰よりもジャスパーのことをよく知っているとするならば(278)、彼女がドルード事件に何らかの光明をもたらす可能性は高い。その彼女は、ダッチェリー氏の指示に従って、翌朝ジャスパーが歌を歌っている大聖堂の中に姿を現わすことになるが、そのとき大聖堂の中に指し込む朝日は、事件にもたらされる光明だけでなく、通りからダッチェリー氏の部屋に差し込む「通り」化する光を連想させずにはいない。

このことがジャスパーを犯人として確定するかどうかはともかく、クロイスタラムのさらなる「通り」化が、ロンドンやセイロンにつながるルートの一部として大聖堂を吸収することを意味するならば、「中心」ということはもはや無意味である。実質上、クロイスタラムは消滅したのだ。こうした事態はもちろんで、近くに鉄道が開通したという、時代の大きな流れの中に生じたことは間違いのない。しかし、本通りが町を貫くという、「通り」化されやすい構造を持った場所が舞台として選ばれたとき、既に潜在的に予告されていた事態だと言えなくもない。だとすれば、予告していたのはやはり、通りが縦横に走るロンドンを繰り返し描き、通りを知り尽くしていたディケンズであった。

*

最後に、ルートとエドウィン・ドルードの関係について少し触れておこう。彼はたびたび婚約者ローザに会うために、クロイスタラムに帰ってくるのだが、どういうわけか例のルートを通過していることに言及されない。第2章で初めて我々の前に姿を現わすときから、どこをどう通ったか一切触れられないまま、既にクロイスタラムの中にいるという形を彼は繰り返している。彼に注目する限り、例のルートは一切視野に入っていない。それは出ていくときも同じで、常に彼は既になくなっていくのだ。未完の小説とはいえ、彼が失踪したのか殺害されたのか未だにはっきりしないのも、彼のこうした性質と関係があるだろう。

彼のこの特徴は、ロンドンのステイプル・インに来たときにも発揮され、彼はいきなりグルージャス氏の部屋に入ってくる。そのときのロンドンが、様々なルートによって開かれた場所であることを忘れさせるかのように、濃い霧があたり垂れ込めて見通しが悪いのも、偶然として片付けることはできない。

注

- ¹ Raymond Williams, *The Country and the City* (1973; London: The Hogarth Press, 1985) 154.
- ² Charles Dickens, *The Mystery of Edwin Drood*, Oxford Illustrated Dickens edition (Oxford University Press, 1987) 18. 以下、引用はこの版を用い、頁数のみを示す。
- ³ Raymond Williams 155.
- ⁴ Wendy S. Jacobson, *The Companion to The Mystery of Edwin Drood* (London: Allen & Unwin, 1986) 46.